ふたなりお姉さんに男の娘がメスドに堕とされちゃう小説本

R-18

After

Before

「ふたなりお姉さまに男の娘がメイドに堕とされちゃう本」

黒百合同好会

目次

1. さっそくメイド篇・・・・・・・・・・・・・・2
2. 堕とされ編・・・・・・・・・・・・・・・・12
3. あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・・56

『さっそくメイド篇』

鳳家の一日は優雅なブレークファストから始まる。広くあつらえられた部屋にはこの館の主人である鳳（おおとり）麗雅（れいか）が澄ました顔で紅茶を口に含む。

「あなた、紅茶のおかわりをいただけるかしら？」

彼女がそう言うと、部屋の中にいた二人のメイドの内、小さい方と大きい方で言うと、大きい方、金髪と銀髪で言えば銀髪の方が凛とした声音で答えた。

「はい、ただいまお持ちします」

「いえ、紫苑、あなたは今日はいいわ」

銀髪の、つまり紫苑と呼ばれたメイドはすでに動き出そうとしていたのに、主人である麗雅から待ったを掛けられ、怪訝な顔を浮かべる。それもそうである、今までの鳳家で、このようなことはなかったからだ。そもそも、鳳麗雅直属のメイドは彼女一人だけであり、衣食住から夜の伽まですべてを担当していたのだ。彼女一人がいれば他のメイドに仕事が回らないまであったのだ。だから、麗雅自らが紫苑を誠意することなどほとんどなかったのだ。

「わたくしはあの子に運んでもらいたいのよ」

その視線は華奢で金髪のメイドに注がれる。蛇に睨まれた蛙のように、金髪のメイドは身をビクリと震わせ、それ以上動かなかった。

今までのことから、紫苑にとってはそのことがあまり面白くない。私だけのお嬢様だったと言うの

に、新しく一人増えてしまったのだ。いくら、麗雅が望んだことだとしても、紫苑としての望みはただ一つ、いつまでもお世話をし続けるそんな日常の停滞であった。だから彼女の態度は金髪のメイドに対しては酷く冷徹で、顎で早く行けと示すだけである。

そんなこんなで、小さなメイドはようやく動き出し、部屋の隅へと引っ込んでいった。

「ねぇ、あの子って呼び方じゃ困るでしょ、私、あの子に新しい名前を与えたいと思うのよ」

あの子、と呼ばれるのも無理もなかった。何分、今はメイドの恰好をしているものの、彼女は彼で――つまり、男であったのだ。しかし、その風貌は若くエネルギッシュな少女そのもので、伸ばしていたのかフワフワの金色の髪の毛と痛み一つ存在しない綺麗な肌、そして細くいつでも折れてしまいそうな体が、彼を男から中性的な雰囲気の可愛い女の子へと見せていたのである。

紫苑は人間のおかしさについてふぅっとため息を漏らしてから、一言、相槌を打つ。

「そうですねお嬢様」

「そうね……、あの子の元の名前って何だったかしら？」

「嘉島徹（かしまとおる）だったかと」

「うーん、透ちゃんでも通じなくはないけど、できればもっと女の子っぽい名前が好ましいわ」

「その通りだと私も思いますわ。あのような格好をしているのでしたら、それ相応の名前が必要になります」

紫苑も視界の隅で小柄な金髪メイドを追っていた。何分、メイドになったのが昨日のことなのだ。失敗などされて、高価なティーカップや皿を割られてはいけない。そのストレスが、紫苑の心の眉間に深い皺を作る。

「透子……、どこかしっくりこないわね」

ぶつくさと呪文のように名前を唱える麗雅の姿に紫苑は感嘆の息を漏らす。今日も、お嬢様は美しいと、悦に浸るのが、彼女にとっての毎朝の楽しみであった。艶がかった漆黒の髪に、少し下がった目尻、ガラス玉のようにキラキラと輝く大きな瞳を包むのは、長い睫に傷一つない磁気のように美しい肌。毎日のように体を重ねてきたとはいえ、紫苑にとっては毎日のお嬢様の成長はとても麗しく思えた。

「そうだわ、マオなんていいわね！」

「とてもいい名前でございます、お嬢様」

「嘉島の『ま』と透の『お』を取ってのよ、私って天才だと思わないかしら？」

「とても聡明でございまし、お嬢様」

「あぁ、とてもいい気分だわ。ジグゾーパズルの最後の一ピースをはめた時のような気分よ」

紫苑は相槌を打つと同時に俯き、微笑を浮かべた。そして、麗雅の些細な変化にも気づき、思わず舌なめずりをする。

「……お嬢様、今、私がお鎮めさせていただきます」

「それには及ばないわ紫苑」

麗雅は再び彼女を制止し、部屋の奥へと目線をやった。

「せっかく、良い名前を付けてあげたのですもの、教えて差し上げなくてはいけませんわ、体にたっぷりと」

麗雅のその下卑た笑みに紫苑は歯がゆい思いを感じながらも、仰せの通りにと言った形で、マオの元へと向かった。

「遅い、いつまでやっているつもりだ？」
「すみません、でも――」
「でもでも何でもない、とりあえずミルクを先にお持ちしろ！」
ヒッと高い声を出して、マオこと嘉島徹は慌てて備え付けの冷蔵庫へと駆けて行った。
なにしろ、紫苑は麗雅の前とそれ以外では見せる顔が違う。さすがプロと言うべきか、恐るべし二面性と言うべきか、麗雅以外の時では冷徹で厳格なメイド長へと変貌するのだ。
「早く運べ」
麗雅に聞こえないギリギリのレベルの声で、紫苑は透を威圧する。
その鬼気迫る顔に彼は急ぎ足で、しかし、こぼさないようにと細心の注意を払いつつ彼女の元へと向かった。
「遅かったじゃない、なにしていたの」
「申し訳、ありません」
「私は別に怒っているのではないのよ？ 何していたのかが気になるだけ」
麗雅のうふっと笑い、優しく柔和な笑みを浮かべ、彼の顔を覗き込んだ。瞳と瞳がぶつかり、彼はドキリとする。
「それは、その紅茶の準備に手間取りまして、それで、ミルクだけを」
「そう、なら紅茶は紫苑がやってくれているわけね」
「そうで――うわっ！」
マオの足に、麗雅の肉付きのいい脚が引っかかる。それにより、体勢を崩した彼は小さめのティーポットに入れられていたミルクを盛大にこぼしてしまった。

「……お嬢様」
そう、盛大にこぼしたのだ。床はべちょべちょで、彼の着ている薄いスカートは太ももに張り付き、細い足を浮き彫りにする。そして何より、空になったティーポットの中身の大半は麗雅の腰から下に集中してかかっていた。
「そうね、濡れてしまったわね」
滴る白濁液がぴちょんと音を立て、白いタイルに落ちる。恐る恐るマオは彼女の顔を覗き込むが、そこに怒りなどの表情は見えなかった。
「せっかくの良いニュースがあったのに、私の膝を濡らしてしまうなんて――」
彼は知っている。唇を吊り上げさせ、舌なめずりを見せる肉食獣のような表所を見せる時、碌な目に合わないと。
「もも、申し訳ありません！ 今すぐタオルか何か拭くものを！」
逃げようと、震える声でそう言うも、麗雅に手で静止させられる。
「必要ないわ。 この鳳麗雅が汚れた体を拭くだけで満足できるとお思い？」
「で、では、入浴の準備を！」
「違うわよ、マオちゃん。 あなたが綺麗にするのよ。 あ、マオってのはあなたの新しい名前ね」
「それはいったい、どういう――」
「あなたが舐めてキレイするのよ、マオちゃん？」
そう言って彼女はスカートをめくり、形の良い太ももと、膨らんだ股間を露わにした。
自分のものよりも大きいかも、と透ことマオは息をのむ。
「はやくなさい」

麗雅がそう冷たく言い放つのをきっかけに、マオは覚悟を決めた。
「し、失礼します」
跪き、顔を麗雅の太ももへと近づける。そして、その白くて滑らかなな肌に口をつけた。
「いいこよ、マオちゃん」
軽く接吻をし、濡れて光る太ももを丁寧に舐め上げていく。白濁液を小さな舌でゆっくりと、優しく下へ運ぶその姿を見て、麗雅のそれはさらに燃え上がり、大きく怒張していく。
さわり、さわさわと生温かく濡れた赤い舌。時折、上目遣いで麗雅の様子を伺うマオのうるんだ瞳。その全てが彼女に背徳感とこれ以上とない興奮を覚えさせる。
「マオちゃん、その辺りは綺麗になったわ。別のところをお願い」
「別のところと言いますと……」
マオはチラリと、それに目線をやる。さすがに彼も抵抗感があるらしく、頬をかぁっと赤く染め上げ、戸惑う様子を見せた。
「そこも、丹念にお願いするわ。できないとは言わせないわ。なにしろそこをそんなに大きくさせているのかしら」
麗雅がくすりと笑うと、マオは照れたようにスカートを抑えつける。
しかし、それは返ってその存在感を顕著に示し、マオに自分のしている格好が可笑しなことを自覚させた。
「さぁ、お舐めなさい変態さん」
「……はい」
渋々、もしくは嫌々といった様子でマオは麗雅のスカートをめくる。するとそこには、下着では抑

えきれず、はみ出してしまった肉棒の姿が、待ってました言わんばかりに現れた。
そして、スルスルと慣れた手つきで下着も脱がす。マオの眼鼻の先に女性にはあるはずのない器官が、存在しているのだ。
麗雅の男性器の大きさにいつもながらに驚愕し、マオが吐息を漏らすと、返事をするかのように、それはビクビクと跳ねてみせた。もはや、我慢たりえないらしくは先っぽは厭らしく、艶美に濡れていた。
まず初めに、チロチロと舌で転がした。
「あぁ、上手よ」
麗雅が嬌声を上げると同時に、肉棒は喜びを示し暴れようとする。それを逃がさんと、マオは一気に口に含み、唇を使い、しごき上げた。
「そんなっ、激しいわっ」
口をすぼませ、吸い上げながら、引き抜くと、ちゅぽんっという軽快な音が部屋に響く。腰はびくつき、陰嚢の下の花も蜜で湿っぽくなっていた。マオはそれを軽く舐め上げながら、裏筋を責め上げる。陰核から玉へ向かい、そして線に沿って鈴口まで。早すぎず、遅すぎず、いたぶるようなその行動に、麗雅は大きく感嘆の息を漏らした。
「本当に上手よ。こんなに美味しそうにちんぽを舐める男の子を私はマオしか知らないわ」
「そんなこと、美味しそうだなんて……」
「思ってないことないでしょ？ 本当は好きで好きでたまらないくせに、このちんぽが」
そうやって麗雅に責められると、マオは視線を逸らし、下唇を噛む。
「そうやって表面上だけ嫌がっても誤魔化せないわ。だったらその乳首と男の娘ちんぽはどう言い

訳するの？」
麗雅の両手がマオのピンととがった乳首をメイド服の上から摘み上げた。
「あぁ、そんなっ」
「ほら、服の上からでもわかるくらい固くなっているわ。 体は欲しがっているんでしょ？」
こりこりと、白く細い指が責め立てる。そのたびに、マオは体をくねらせ快楽に耐えようとしていた。
「これは、先っぽが、服とこすれて……」
「あら、ブラジャーが必要なのね、それじゃあ、もう男の子ではないわね、立派なメスよ」
「そんなこと、あぁっ！」
麗雅の長い指がマオの乳首を捻り上げる。すると、タガが外れたようにマオは声を上げる。
「なにっあなたがっ気持ちよくっなっているのよっ！」
そう言うと、麗雅は固くなったそのしこりから手を放し、マオの頭を掴む。そして、トロンと悦に浸っている彼の口に自らの欲望を押し当てる。
「ま、待ってくだひゃいぃ、それは――それは――」
「いいからあなたは口を開けてなさい、自分ばっかり気持ちよくなるメイドにはお仕置きしてあげるわ」
「駄目ですぅ、だふぇふぇ――」
彼が望む望まないに関わらず、肉棒は歯を押しのけ、口内へと侵入する。マオの手は麗雅の手のひらを外そうと動くが、もはや逃げることすらできない。
「こら、動かないで。 それとも、自ら私にイマラチオしてくれるのかしら？」